

平成25年度

幼稚園教育のあゆみ

—「元気兵庫へ ころろ豊かな人づくり」をめざして—

第46集



兵庫県教育委員会

発刊にあたって

「幼稚園教育のあゆみ」第46集を発刊するにあたり、本県幼児教育の充実のためにご尽力いただいております関係者の方々に心から感謝申し上げます。

各幼稚園においては、幼稚園教育要領の趣旨を踏まえた特色ある教育課程の編成・実施のもと、充実した教育実践に努められていることと思います。

さて、「子ども・子育て関連3法」が可決されて以来、平成27年度の実施を目指し、国においても「子ども・子育て会議」を開催し、その在り方について検討を進めているところです。

幼児教育の在り方は、認定こども園、幼稚園、保育所など様々ですが、幼児教育については、子ども・子育て新制度に係る基本指針において、幼児期は、知的・感情的な面や人間関係の面でも、日々急速に成長する時期であり、この時期の教育の役割は極めて重要であると記されています。

また、集団生活において人との関わりを深めさせ、規範意識の芽生えを培い、異年齢交流において思いやりや責任感、年上への憧れや成長の意欲を育むために、一人一人の幼児理解に基づき、環境を計画的に構成し、幼児の主體的な活動を援助していくこと、小学校教育との連携・接続についても、十分に配慮することが必要であると記されています。

本県においても、幼児教育の重要性を踏まえ、幼児期の教育の一層の充実を図る取組を進めているところです。

今年度は、「幼児期と児童期の『学び』の接続充実事業」を実施し、幼児期と児童期の教育の共通の目標である「学びの基礎力の育成」をテーマに、実践協力地区6地区において実践研究に取り組みました。また、学識経験者及び実践協力地区教員等からなる学びの基礎力向上推進委員会を設置して、実践協力地区の取組を基に、「学びの基礎力の育成」のための指導内容・指導方法の工夫改善について検討しました。その成果等については、「指導の手引」にまとめるとともに、学びの基礎力向上研修会において普及・啓発を行いました。

さらに、幼稚園教育理解推進事業については、地区別幼稚園教育理解推進研修会・兵庫県幼稚園教育理解推進研究協議会での研究協議を重ね、国が実施する中央協議会において、「言葉による伝え合い」「特別支援教育」「学校評価」について研修を行いました。

今後の幼児教育においては、幼児の入園から修了までの発達を見通すだけでなく、幼児期の学びが、それ以降の学校教育にどのようにつながっていくのか意識し、指導の充実を図っていただきたいと考えています。

各幼稚園におかれましては、本冊子を参考に、園長先生方のリーダーシップのもと、教育課程の改善を行うとともに、幼稚園教員一人一人の資質及び専門性の向上に向け研鑽を積み、質の高い幼児教育が展開されることを心から期待しております。

平成26（2014）年3月

兵庫県教育委員会

幼稚園教育のあゆみ

第46集

目次

発刊にあたって

I 幼稚園の現状と推移

- ・ 幼稚園数、園児数、教員数等 1
- ・ 平成25年度 県内幼稚園・保育所設置状況 3

II 幼稚園教員の研修

- 1 幼稚園教育理解推進事業 5
- 2 幼稚園等新規採用教員研修 6
- 3 10年経験者研修 6
- 4 幼児期と児童期の学びの接続充実事業 7

[取組内容]

- (1) 朝来市立大蔵こども園・朝来市立大蔵小学校 9
- (2) 丹波市立船城幼稚園・丹波市立船城小学校 11
- (3) 川西市立川西北幼稚園・川西市立川西北小学校 13
- (4) 洲本市立加茂幼稚園・洲本市立加茂小学校 15
- (5) 明石市立明石幼稚園・明石市立明石小学校 17
- (6) 赤穂市立高雄幼稚園・赤穂市立高雄小学校 19
- 実践から明らかになったこと 21

表紙の絵「わたしのたんじょうび」

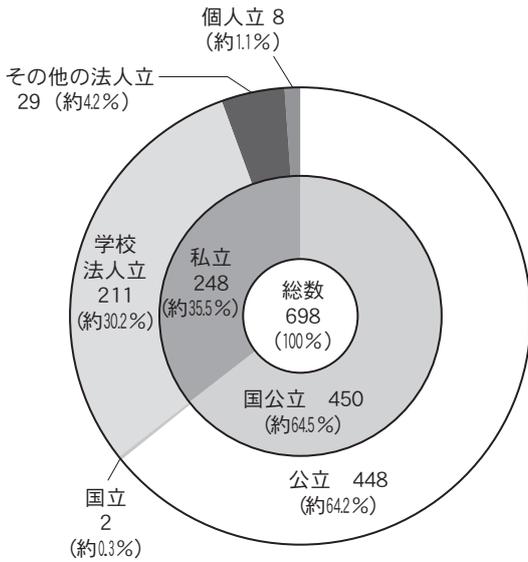
太子町立太田幼稚園 遠山 歩果（4歳児）

I 幼稚園の現状と推移

1 幼稚園数

兵庫県内の幼稚園総数は698園で、前年度より10園減少し、設置者別では、国立幼稚園2（構成比約0.3%）、公立幼稚園448（構成比約64.2%）、私立幼稚園248（構成比約35.5%）である。

私立幼稚園の設置者別では学校法人立が211園と一番多く、次いでその他の法人立が29園、個人立8園の順となっている。



設置者別園数（平成25年度学校基本調査）

年度	計	国立	公立	私立
21	742	2	498	242
22	726	2	480	244
23	724	2	475	247
24	708	2	458	248
25	698	2	448	248

（単位：園）

2 園児数

園児数は70,987人（男35,984人、女35,003人）前年度より570人減少した。

設置者別にみると、国公立幼稚園の園児数は、25,148人で前年度より177人減少し、私立幼稚園の園児数は、45,839人で393人減少した。

設置者別園児数及び教員数（平成25年度学校基本調査）

区分	園数	園児数	教員数	1園当たりの在園児数	教員1人当たりの在園児数
国立	2	254	14	127	18.1
公立	448	24,894	1,990	55.6	12.5
私立	248	45,839	2,880	184.8	15.9
計	698	70,987	4,884	101.7	14.5
H23	724	70,804	4,876	97.8	14.5
H24	708	71,557	4,890	101.1	14.6

年齢別に見ると、
 3歳児13,902人(19.6%)
 4歳児27,278人(38.4%)
 5歳児29,807人(42.0%)で、
 前年度より、
 3歳児は328人、4歳児は37人
 5歳児は205人減少した。

年齢別園児数(平成25年度学校基本調査)

区分	計	3歳児	4歳児	5歳児
国立	254	59	94	101
公立	24,894	536	10,893	13,465
私立	45,839	13,307	16,291	16,241
計	70,987	13,902	27,278	29,807

(単位：人)

3 教員数

本務教員数は、4,884人(男239人、女4,645人)で、前年度より6人減少している。
 兼務教員は821人(男155人、女666人)である。

男女別教員数(平成25年度学校基本調査)

区分	平成24年度		平成25年度		差引増減	
	教員数(人)	構成比(%)	教員数(人)	構成比(%)	教員数(人)	
本務者	計	4,890	100	4,884	100	-6
	男	232	4.7	239	4.9	7
	女	4,658	95.3	4,645	95.1	-13
兼務者	計	760	100	821	100	61
	男	160	21.1	155	18.9	-5
	女	600	78.9	666	81.1	66

(注) 構成比は男女別の割合である。

4 職員数

本務職員は655人で、このうち国立2人、公立185人、私立468人で前年度より8人減少した。

平成25年度 県内幼稚園・保育所設置状況

平成25年5月1日

事項 地域	国 公立 幼稚園	私 立 幼 稚 園	国 公 私 立 計	公 立 幼 の な い 地 域	公 立 保 育 所	私 立 保 育 所	公 私 立 計	事項 地域	国 公 立 幼 稚 園	私 立 幼 稚 園	国 公 私 立 計	公 立 幼 の な い 地 域	公 立 保 育 所	私 立 保 育 所	公 私 立 計
神戸市	(5) 42	(6) 97	(11) 139		61	145	206	明石市	<u>28</u> ₁	2	31		11	27	38
尼崎市	<u>18</u>	(2) 24	(2) 42		28	53	81	加古川市	<u>20</u>	3	23		7	25	32
西宮市	(1) <u>20</u>	40	(1) 60		23	33	56	三木市	<u>10</u>	1	11		4	10	14
芦屋市	<u>9</u>	4	13		6	8	14	西脇市	8	0	8		0	8	8
伊丹市	17	9	26		8	16	24	小野市	<u>2</u>	0	2		0	14	14
宝塚市	12	14	26		8	16	24	加東市	<u>2</u> ₁	0	3		3	11	14
川西市	9	8	17		8	11	19	多可町	3	0	3		2	3	5
川辺郡 猪名川町	<u>4</u>	2	6		1	3	4	加西市	(1) <u>9</u>	1	(1) 10		9	5	14
三田市	<u>10</u>	10	20		1	7	8	高砂市	<u>8</u>	1	9		9	10	19
丹波市	<u>13</u>	4	17		3	17	20	稲美町	<u>5</u>	0	5		0	4	4
篠山市	<u>14</u>	0	14		5	2	7	播磨町	3	0	3		0	4	4
洲本市	5	1	6		9	3	12	姫路市	<u>46</u>	11	57		32	52	84
淡路市	1	0	1		16	3	19	相生市	6	1	7		3	2	5
南あわじ市	6	1	7		13	4	17	たつの市	19	1	20		12	14	26

事項 地域	国 公立 幼稚園	私 立 幼 稚 園	国 公 私 立 計	公 立 幼 の な い 地 域	公 立 保 育 所	私 立 保 育 所	公 私 立 計	事項 地域	国 公 立 幼 稚 園	私 立 幼 稚 園	国 公 私 立 計	公 立 幼 の な い 地 域	公 立 保 育 所	私 立 保 育 所	公 私 立 計
	赤穂市	10	1	11		6	0		6	佐用町	0	1	1	○	12
上郡町	3	0	3		2	1	3	豊岡市	22	3	25		10	12	22
福崎町	4	0	4		4	2	6	新温泉町	3	0	3		3	1	4
市川町	2	0	2		4	1	5	香美町	9	0	9		2	4	6
神河町	4	0	4		0	2	2	養父市	4	0	4		10	3	13
太子町	4	0	4		1	3	4	朝来市	9	0	9		8	6	14
宍粟市	(3) 15	0	(3) 15		5	9	14	合 計	(10) 440	(8) 240	(18) 680	1	349	554	903

(注)1・()の数字は休園数を示し、内数とする。

公立休園10【神戸市5、西宮市1、加西市1、宍粟市3】

(注)2・市町名のゴシックは公立幼稚園における3年保育完全実施市町(3市町 7.3%)を示す。

- ・市町名の下線は公立幼稚園における3年保育1部実施市町(9市町 22.0%)を示す。
- ・公立幼稚園の園数は2年保育完全実施市町(18市町 43.9%)を示す。
- ・公立幼稚園の園数の下線は2年保育1部実施市町(5市町 12.2%)を示す。
- ・この他、へき地保育所として、計3保育所がある。
- ・休止保育所として、計6保育所【朝来市1、淡路市3、南あわじ市1、宍粟市1】がある。

Ⅱ 幼稚園教員の研修

1 幼稚園教育理解推進事業

(1) 趣旨

幼稚園の教育課程の編成をはじめとして幼稚園教育に関する内容、幼稚園の運営・管理についての専門的な講義や研究協議等を行うことにより、幼稚園教育の振興・充実を図る。

(2) 事業の概要

本事業は、地区別幼稚園教育理解推進研修会、兵庫県幼稚園教育理解推進研究協議会を実施するものであり、その成果を文部科学省において実施される「中央協議会」において報告・協議する。

① 協議主題

ア 幼稚園の教育課程の編成及び実施に伴う指導上の諸課題についての専門的な講義や研究協議等

<協議主題 3>

人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わうようになるための環境の構成や教師のかかわりについて

<協議主題 4>

特別な支援を必要とする幼児の状態等に応じた計画的、組織的な指導の在り方について

イ 幼稚園を取り巻く諸課題についての専門的な講義や研究協議等

<協議主題 6>

幼稚園における学校評価について

② 兵庫県幼稚園教育理解推進研究協議会

県内各地区において取り組んでいる実践を中心に、教育課程の編成をはじめとして、幼稚園教育に関する諸課題について研究協議を行う。

実施日	会場	参加者
平成25年8月19日(月)	兵庫県民会館	45名(うち 国立幼2名、私立幼6名)

③ 中央協議会

兵庫県幼稚園教育理解推進研究協議会参加者の中から推薦された者が、その成果をもって参加し、指導上の諸課題や幼稚園を取り巻く諸課題について研究協議することにより、幼稚園教育の一層の振興・充実を図る。

実施日	会場	参加者
平成25年12月 9日(月) 10日(火)	独立行政法人 国立オリンピック 記念青少年総合センター	14名(兵庫県教育委員会に推薦された者)

④ 地区別幼稚園教育理解推進研修会

文部科学省の「幼稚園教育理解推進事業の協議主題」に基づき、各地区において研修会を開催し研究協議することで、教育課程の改善を図り、幼稚園教育の振興・充実に資する。

ア 実施日、内容等

地 区	実施日・会場・参加人数
	内 容
神 戸	平成26年3月7日(金)・神戸市総合教育センター・280名(見込み)
	報告「中央協議会」及び質疑 講演「子供の発達を支える」 講師 神戸大学大学院 教授 鳥居 深雪
阪 神 宝 塚 丹 波	平成26年1月15日(水)・丹波広域農業研修センター・172名
	報告「中央協議会」及び質疑 報告者 伊丹市立南幼稚園 教諭 吉田 典子 講演「特別な支援を要する幼児の指導の在り方について」 講師 武庫川女子大学 教授 石川 道子
播 磨 東 加 東 淡 路	平成25年7月31日(水)・洲本市文化体育館・140名
	講演「子どもの育ちにおける課題と教師の援助」 講師 神戸松蔭女子学院大学 教授 寺見 陽子 分科会ごとに研究協議
播 磨 西 光 都	平成25年7月26日(金)・姫路市勤労市民会館・155名
	講演「Nobody's perfect!～子どもたちにラブレターを書こう～」 講師 神戸親和女子大学 教授 新保 真紀子 分科会ごとに研究協議
但 馬	平成25年8月7日(水)・県立但馬長寿の郷・78名
	実践発表 発表者 朝来市立糸井こども園 主任幼保教士 松田 美保 豊岡市立豊岡ひかり幼稚園 園長 芦田 哲 分科会ごとに研究協議 指導助言 講師 県立豊岡聴覚特別支援学校 教頭 松本 茂樹

※参加者数 約825名(見込み)

2 幼稚園等新規採用教員研修

講義や実習、また、教員相互の交流を通して、実践的指導力を養うとともに、幅広い識見を身に付けることによって、幼稚園教員としての資質の向上を図る。

期間	内容	参加者	備考
平成25年4月 ～ 平成26年3月	園内研修 10日間 (所属幼稚園において実施) 園外研修 9日間 (3泊4日宿泊研修を含む)	63名	宿泊研修 於：県立南但馬自然学校 日程：平成25年8月26日(月) ～29日(木)

3 10年経験者研修

教育公務員特例法第24条の規定に基づき、個々の教諭の能力、適性やニーズに応じて必要な事項に関する研修を実施し、指導力の向上等、教諭としての資質の向上を図る。

期間	内容	参加者	備考
平成25年4月 ～ 平成26年3月	園内研修 10日間 (所属幼稚園において実施) 園外研修 5日間 (幼稚園10年経験者研修を含む)	22名	幼稚園10年経験者研修 於：兵庫県民会館 日程：平成25年7月24日(水) 参加者：32名(公立22名、私立10名)

4 幼児期と児童期の「学び」の接続充実事業

(1) 趣旨

幼児期の教育と児童期の教育の教育活動のつながりを見通しつつ、幼児期における遊びの中で
の学びと児童期における各教科等の授業を通した学習の系統性を確保するなど、学びの基礎力の
向上のため、幼児期と児童期の教育内容や指導方法の工夫改善について実践研究を行い、それら
の取組成果の普及・啓発を図る。

(2) 実践研究の内容

- ① 学びの基礎力の育成を図る体験の連続性・一貫性の明確化
 - ・実践協力地区における課題の明確化
 - ・体験のつながりの分析
- ② 幼小連携による体験の質を高めるための教育内容・指導方法の改善
 - ・相互参観による実践の改善
 - ・事例研究による一般化
- ③ 幼稚園教員と小学校教員の指導力向上
 - ・教育内容・指導方法等の開発
- ④ 幼小連携を促進させる手法の普及・啓発

(3) 実践協力地区

実践協力地区	園児数・児童数	クラス数	教職員数	保育年数
川西市立川西北幼稚園	62	3	8	2年保育
川西市立川西北小学校	408	12	40	
明石市立明石幼稚園	64	3	4	2年保育
明石市立明石小学校	458	15	22	
赤穂市立高雄幼稚園	34	2	5	2年保育
赤穂市立高雄小学校	144	6	14	
朝来市立大蔵こども園	77	4	11	3年保育
朝来市立大蔵小学校	185	6	17	
丹波市立船城幼稚園	20	2	3	2年保育
丹波市立船城小学校	74	6	13	
洲本市立加茂幼稚園	22	2	3	2年保育
洲本市立加茂小学校	214	8	21	

(4) 学びの基礎力向上推進委員

所属	氏名	所属	氏名
兵庫教育大学大学院	名須川 知子 教授	赤穂市立高雄幼稚園	橋本 典子 教諭
神戸大学大学院	伊藤 篤 教授	赤穂市立高雄小学校	松原 優子 主幹教諭
神戸松蔭女子学院大学	春 豊子 教授	朝来市立大蔵こども園	磯 ひとみ 主任教諭
頌栄短期大学	竹内 伸宜 教授	朝来市立大蔵小学校	植村 睦美 教諭
神戸市立東灘のぞみ幼稚園	吉村 乃子 園長	丹波市立船城幼稚園	小西 あゆみ 主任教諭
川西市立川西北幼稚園	山本 由美子 園長	丹波市立船城小学校	谷口 祥子 教諭
川西市立川西北小学校	大川 知子 教諭	洲本市立加茂幼稚園	板家 加織 教諭
明石市立明石幼稚園	深津 久美子 主幹教諭	洲本市立加茂小学校	坂田 知子 教諭
明石市立明石小学校	岩村 淳子 教諭		

(5) 学びの基礎力向上研修会

今後の幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について共通理解を図り、学びの基礎力の育成について実践発表やパネルディスカッションを行う。

実施日	平成26年2月17日(月)
会場	伊丹市 いたみホール
参加者	744名
研修内容	<p>1 基調提案 「幼児期と児童期の『学び』の接続の推進に向けて」 兵庫県教育委員会義務教育課 初等教育係長 本玉 義人</p> <p>2 実践発表 「人や自然とのかかわりの中で伝え合う力を育む保育・授業の創造」 赤穂市立高雄幼稚園 教諭 橋本 典子 赤穂市立高雄小学校 主幹教諭 松原 優子 「考えようとする力を育むために」 ～幼稚園、小学校のつながりから～ 川西市立川西北幼稚園 教頭 岩倉 明子</p> <p>3 パネルディスカッション 「幼児期と児童期の『学び』の接続について」 コーディネーター 兵庫教育大学大学院 教授 名須川 知子 パネリスト 神戸大学大学院 教授 伊藤 篤 頌栄短期大学 教授 竹内 伸宜 赤穂市立高雄幼稚園 教諭 橋本 典子 赤穂市立高雄小学校 主幹教諭 松原 優子 川西市立川西北幼稚園 園長 山本 由美子 川西市立川西北小学校 教諭 大川 知子</p>

(1) 朝来市立大蔵こども園・朝来市立大蔵小学校

「学びを広げ、深め、つなげる」～多様な体験活動を通して学びの基礎を培う～

1 研究内容

- (1) 遊びや自然体験を通じた学びを広げ、深め、つなげていく教師の援助や環境の構成の在り方
- (2) 幼稚園と小学校の教育内容や指導方法の工夫改善
- (3) 学びの連続性を考えた小学校との連携の在り方

2 研究方法

- (1) 地域に出かけ体験活動や人とのかかわりの中で、学びにつながる保育・教育計画や実践
- (2) 環境の構成や教師の援助の在り方と、幼児・児童の活動を中心とした保育・指導記録の作成
- (3) PDCAサイクルに基づいた園・校内研修体制の構築
- (4) 先進園の視察や講師を招聘しての園・校内研修の実施

3 学びの基礎力の育成を意識した実践事例

視点：自己を調整しようとする力

3年保育 5歳児 11月

(1) 幼稚園

- ① この時期に目指す幼児の姿
友達とイメージを膨らませながら意欲的に遊びを進めようとする。
- ② 「自己を調整しようとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫
店番と他の店で遊ぶ順番を決め、互いの店を行き来する中で、いろいろな考えがあることに気づき、友達の考えが分かって、さらに遊びを工夫して進められるようにする。
- ③ 事例 「なんで並んでくれへんの」
ねらい 遊びに必要なルールを考え、工夫して伝えようとする。

※下線は学びにつながる姿

ドングリゲームのスタートの場所と、順番を待つ場所を決めていたA児とB児だったが、自分たちが考えていた場所とは違う場所で並んでいたC児とB児が言い合いになる。

「どうした？何かあった？」と教師が聞くと、「Aちゃん、させてくれへん。」とC児たちが口々に教師に訴えてくる。B児は、「順番くるまでここで待たなあかんのや。」と受付を指差し、A児も大きく頷いて、「みんな、なんで並んでくれへんの！」と頬を膨らませて、その場に座り込む。「僕、並んどったで！」と反論するC児。教師がそれぞれの言葉に頷き、「そっか、並ぶ場所が違ったんやね。でも、どうして受付の所にみんな並ばないのかな？」と、言うと、

C児「だって知らなかった。」

B児「受付のところに、『ここに並んで』って書いてあるやろ。」

D児「その看板、上向いて見えへん。それに字だけやったら、ちっちゃい組さん分からんで!!」

B児「あっ！ほんまや。」と看板を直しはじめると、A児も立ち上がり「小さい組さんにも分かるように、『ここで止まります』って、印つけるわ。」とカラーテープを準備する。するとB児が「ここで待ってくださって、僕、言うわ！」と答える。そして、「次に行く所が分かるように矢印も、貼っとこか。」と、2人で話しながらカラーテープを貼った。

④ 教師の援助のポイント

- ・ 互いの思いに気付けるよう、教師は中立の立場で子どもたちの話を聞き、整理する。
- ・ 友達の話が分かり友達の意見を納得して受け入れられるよう、話し合える時間を十分にとる。
- ・ 遊びのルールが分かりやすいように、その伝え方を工夫しようとする姿を認める。

⑤ 小学校へつながる学びの基礎力

この事例から見取った学び	→	小学校へつながる学びの基礎力
自分の思ったことを素直に表現する。	→	<ul style="list-style-type: none"> 互いの思いを伝え合いながら、分かり合っ て遊びを進める。 きまりの大切さに気付き、守ろうとする。
友達の考えに共感し、友達と協力して遊びを進める。		

(2) 小学校

1年生 11月

① 「自己を調整しようとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
互いの思いを伝え合いながら、分かり合っ て遊びを進める。	→	友達と協力し、自分たちの生活を楽しむ 方法を工夫する。

② 事例 【生活 「あきってきもちがいいね」】

本時の目標：パーティーを工夫して進めたり、自分の思いを伝えたりして、みんなと協力して楽しむことができる。

指導のポイント：友達と相談したり、協力したりしやすい人数のグループを構成し、自分たちの手で、思いを実現させていけるようにする。 ※下線は指導の工夫

待ちに待ったパーティーの日、グループごとに出し物を宣伝する（30秒間コマーシャル）時間をつくった。子どもたちは、グループで相談し、一人一人の台詞を決めて、前に出てプレゼンテーションをした。自分たちが創り上げてきたことを言葉にしてまとめ、人に伝えるということは、難しいと感じていたようだが、毎回、プレゼンが終わると、大きな拍手が湧いた。「さあ、いよいよ始まるよ！」「ようこそ！しぜんいろいろパーティー」と各々が声に出し、喜び勇んでグループの場所へと移動した。グループ内で、順番を決めて、店番をする児童と、他のグループを見て回る児童とに分かれたことで、全部のグループを回って楽しむことができた。

「落ち葉の影絵が始まるよ。」と声がかかり、みんなが2班のところ集まった。楽しみで興奮しており、「見えへん。」「前の人座って。」など、ざわついていると、3班のA児が、「『静かに見てください。スクリーンをさわらないでください』って、看板に書いてあるやん。」と全体に注意を呼びかけた。「ほんまやわ。Aちゃん、よく気が付いたね。すごいなあ。」と教師が声を掛けると、みんなも静かにその場で見ようとした。影絵を担当していた2人のうち、B児は、張り切ってその場を仕切ろうとした。もう一人のC児は、B児と一緒に落ち葉や木の実で作ったものを映し出し、考えた台本に合わせて、勇気を出して普段よりも大きな声で、台詞を言うことができた。ストーリーがみんなに伝わり、拍手をもらって笑顔を見せながら、「葉っぱが壊れないように作り直さんとあかん。」と二人顔を見合わせて、次の課題を見付けていた。

4 接続のポイント

<幼稚園>

トラブルが起こった時に、互いの考えを伝え合うことで、いろいろな考えがあることに気づき、遊びに必要なルールが工夫できるようにする。

<小学校>

活動に応じたグループ構成を考え、自分たちで目的が実現できるようにする。

5 成果と課題

<成果>

- 子ども同士の学び合いの中で、困難に出会って悩んでも、皆で解決しようとする気持ちが芽生えてきた。
- 抽象的思考を深めるためには、直接体験が重要であることを改めて感じる事ができた。

<課題>

- 話し合いの活動を大切に、共通の目的に向かって工夫したり協力したりすることの楽しさを味わう経験をより多くさせたい。
- 幼児の学びの場である、遊びを中心とする生活の場の充実を図っていきたい。

(2) 丹波市立船城幼稚園・丹波市立船城小学校

「豊かな学びにつながる幼小連携」～自己調整力を視点として～

1 研究内容

- (1) 幼児期における保育の工夫、改善
 - ① 主体的な遊び(わくわくタイム)を充実させる。
 - ② クラスやグループで達成感をもってやり遂げる活動を計画的に進める。
- (2) 小学校における授業の工夫改善
 - ① 幼児期の学びを踏まえた授業を工夫改善する。
 - ② 幼児期の学びの特徴を取り入れた教育内容や指導方法を工夫改善する。
- (3) 自己を調整しようとする力に視点を置いた実践に努め、記録をとる。

2 研究方法

- (1) 主体的に活動するための環境を工夫
子どもの思いを生かした体験的な活動を重視する。
- (2) 幼児期と児童期の子どもの学びの共通理解
幼児、児童の実態を把握した上で、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領について相互理解する。
- (3) 教師間の共通理解、相互理解を図る研修
保育・授業参観を行い、参観後の話し合いや情報交換を図る。
- (4) 実践記録の集積や事例の検討

3 学びの基礎力の育成を意識した実践事例

視点：自己を調整しようとする力

2年保育5歳児 11月

(1) 幼稚園

- ① この時期に目指す幼児の姿
友達の考えを受け入れながら、自分の考えも十分に出して遊び、園生活を楽しもうとする。
- ② 「自己を調整しようとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫
自分たちで考えた双六を楽しむ中で、自分の気持ちを伝えたり、友達の気持ちを聞いたりしながら、友達の気持ちに寄り添って考えられるようにする。
- ③ 事例 「順番守ってほしい！」
ねらい 自分たちで考えたルールを守りながら、双六を進める。

※下線は学びにつながる姿

双六で遊んでいたA児は、『1回休み』になった。そこで1回休み、1巡したので、今度は自分の番だと思っていたが、隣のB児がサイコロを振りだした。

A児は「えっ？」と首を横に傾けながら何も言えずにいる。他児もそのことに気付いていない。

「Aさん何か言いたいことはないのかな？」と教師がそばで小さな声で尋ねたが「う～ん。」と言うだけで、今にも泣きそうな顔で友達の方をじっと見ている。

その様子に気付いたC児が「Aちゃん どうしたん？」とA児の顔を下からのぞき込むようにして声を掛ける。

我慢していたA児が「あんな、何でAが1回休んだのにサイコロまわってこうへんの？」とやっと涙声で言う。

すると、サイコロの手を止めてD児が「え～ Aちゃんやってなかったん？」と驚いた様子で尋ねる。周りの子も「Aちゃん、ごめん！」と謝りながらサイコロをA児に手渡した。A児は「いいよ、でも順番は決めたし、守って！」とみんなに聞こえるような大きな声で言った。

するとD児が「もう1回、みんなで順番確認したらいいね。」「うん、そうしよう。」と順番を確認し始めた。そして、「次は、Aちゃん。」と名前を呼び合いながら、もう一度双六遊びが始まった。

④ 教師の援助のポイント

- ・困っている友達に気付けるよう、遊びの様子を見守りながら必要な援助をする。
- ・自信をもって自分の思いを伝えられるよう、一人一人の意見に頷き、共感する。
- ・A児の気持ちに気づき、その気持ちに寄り添って考えようとする他児の姿を認める。

⑤ 小学校へつながる学びの基礎力

この事例から見取った学び	→	小学校へつながる学びの基礎力
友達の困っていることに気づき、相手の気持ちに寄り添おうとする。	→	互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。
自分の気持ちを言葉で伝える。		
遊びが楽しく進められる方法を工夫する。	→	きまりの大切さに気づき守ろうとする。

(2) 小学校

1年生 11月

① 「自己を調整しようとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。	→	相手の気持ちを大切に考えながら行動する。

② 事例 【体育 「ボール運動」】

本時の目標：自分たちで考えた作戦（ルール）を試合で使ってみよう！

指導のポイント：試合につなげるために必要な作戦（ルール）をチームで考えさせたい。

※下線は指導の工夫

3チームに分かれ、勝つための作戦を考えることを大きな柱とし、作戦タイムの時間をもった。作戦タイム中、「ちゃんとやろうや！」とAチームのH児。それに対して、ボールを独占し、遊びに熱中してH児の言葉を聞こうとしないN児。ラストを知らせた「後2分！」という教師の声と共に涙を浮かべたH児を見たN児は、少し困った表情でボールをH児に手渡したが、「全然練習できんかったやん」の一言。試合が始まると、作戦を取り入れて盛り上がるB・Cチームに対し、暗い表情のAチーム。H児は「ちゃんと作戦タイムに練習したら勝てたかもしれんやん」とN児に思いを訴えると、N児は「ごめん」と謝った。次の時間、作戦タイムになると、勢いよくボールを手に「やろ！」とN児。H児は嬉しそうに満面の笑みを浮かべ、Aチームからも「もっと遠くに蹴ったらいいとちゃう？」「ボール蹴って、すぐに走る練習しとく？」と具体的な作戦の言葉が飛び交っている。振り返りでは「みんなで作った作戦をちゃんと守ったら勝てたし、2位になれてうれしかったです」とH児。それを聞いたN児は、照れながら頷いた。

4 接続のポイント

<幼稚園>

友達の気持ちを大切に考えながら行動できるよう、友達の気持ちに気付けるようにする。

<小学校>

一人一人がチームの一員という意識がもてるような人数のチーム編成を工夫する。

5 成果と課題

<成果>

一人一人の指導の実態を継げていくためには、幼小との参観、事後指導の話し合いを定例化していくことの大切さが分かった。

<課題>

幼小で連続して自己調整力を育てるためには、幼小の具体的な目標とする園児と児童の姿を明確にし、具体的な観点別評価等を取り入れながら指導の方向性を共通理解する必要がある。

(3) 川西市立川西北幼稚園・川西市立川西北小学校

「考えようとする力を育てるために」～幼稚園、小学校のつながりから～

1 研究内容

幼稚園において、子どもが「考えようとする力」に着目して、次の2点について研究を進める。

- (1) 幼稚園での学びが次の遊びや小学校の学びにどのようにつながっていくのかを探る。
- (2) 考えようとする力を育てるための指導方法や環境構成の工夫を探る。

2 研究方法

- (1) 保育参観と授業参観を行い幼稚園、小学校の教職員で研修を行う。
 - ① 考えようとする力がどのような場面において育つのか探る。
 - ② 事前事後の研修を通して発達段階に応じた指導の工夫を検討する。
- (2) 幼稚園で培った学びの基礎力が、小学校の生活や学習の中でどのようにはぐくまれていくか検討する。
- (3) 遊びの姿から「考えようとする力」に視点をおいて記録をとり、子どもの内面理解や、指導の手立てについて共通理解する。また、事例研修を通して「考える力」が育つ過程を明確にし、指導方法の工夫、環境の在り方を検討し、改善につなげていく。

3 学びの基礎力の育成を意識した実践事例

視点：考えようとする力を育てるために

2年保育5歳児 10月

(1) 幼稚園

- ① この時期に目指す幼児の姿
共通の課題について友達と話し合い、協力して遊ぼうとする。
- ② 「考えようとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫
身近な秋の自然物に興味をもって遊びに取り入れる中で、遊びの目的を実現するために、試行錯誤する姿を見守る。
- ③ 事例 「かんむり、つくりたい」
ねらい 身近な落ち葉を使って製作を楽しむ。

※下線は学びにつながる姿

園庭の木々が落葉し拾った葉っぱを使って遊びに取り入れようとしている。

教師が「何作るの?」と話しかけるとA児は「かんむりを作ろうと思ってる!」と言い赤色の画用紙をはさみで切り始めた。A児は切った画用紙を輪にして頭に巻いてみるが「小さすぎちゃった!」と言い、別の画用紙をもう一度はさみで切って、頭に巻いてみたがまだ長さが足りなかった。A児は画用紙を手に持ちじっと見つめていた。

教師が「その紙をつないでみたら」と声を掛けると、「そっか!」と言い、切った画用紙2枚を透明テープでつなぎ合わせ、再び頭に巻いてみた。今度は長すぎた様子で「こんなになっちゃった」と言った。

その後、A児は頭に巻いた画用紙を自分の頭にちょうど合う長さまで何度も調整し、透明テープで止め、周りに落ち葉を貼り付け、「はい出来上がり!」と言って教師に見せた。

④ 教師の援助のポイント

- ・頭にぴったりの長さに画用紙を切りたいというA児の思いを受け止め、これまでのA児の生活経験や、やる気から判断して試行する様子を見守る。
- ・A児がイメージしていたように冠を作り上げることができた喜びに共感し、A児があきらめずに試行錯誤できた姿を他児にも広げる。

⑤ 小学校へつながる学びの基礎力

この事例から見取った学び	→	小学校へつながる学びの基礎力
身近な自然物を生かし、自分の作りたいものを形にしていく。	→	自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わう。
試行錯誤しながら遊びを進めていく。	→	目的を実現する方法を、今までの経験から予想して試す。

(2) 小学校

1年生 11月

①「考えようとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
目的を実現する方法を、今までの経験から予想して試す。	→	今までの経験を生かして、目的が達成できそうな用具を選び、比べ方を工夫する。

② 事例 【算数 「おおきさくらべ」】

本時の目標：長さ比べという活動に興味と関心をもつ。

どちらが長い予想し、比べる方法を考える。

指導のポイント：縮小版のプリントを用いることで、試行錯誤させる。

生活体験と結びつけた意見を積極的に認め、広げていく。

※下線は指導の工夫

たぬきときつねがしっぽの長さでもめているという設定に、「しっぽの長さを昨日みたいに調べたい。」「比べたい。」と、本時の課題に興味深々である。さらに、「太いのが短くて、細いのが長い。」という意見に対して、「関係ないやん。」とつぶやくA児。それを教師が「どういうことだろう。」と拾うと、「太さじゃなくて、長さやで。」というB児の意見が出る。「今日は、太さ比べじゃなくて、長さ比べだね。」と教師が本時の課題を確認すると、みんな納得して頷いた。

グループ活動では、課題の縮小版プリントを使って、紙を重ねて透かしてみたり、鉛筆や消しゴム、指などを使って比べ始める。E児は、数図ブロックを用いている友達からヒントをもらっている。だが、どう比べればいいのか戸惑っていたが、前で他の児童が発表するのを見て理解し始め、「1、2・・・6個。」と数図ブロックを数え始めた。

一人で試したり、グループの友達の比べ方を見てヒントを得たり、友達に教えてたり、教えてもらったりしながら、グループ内で自分が解決した答えを伝え合っている。

4 接続のポイント

<幼稚園>

遊びの目的が実現できるよう、幼児のこれまでの生活経験を基に試行錯誤する姿を見守る。

<小学校>

児童が「やってみたい」と思える、発達段階に応じた授業の導入や教材を工夫する。

5 成果と課題

<成果>

- ・幼稚園、小学校の教職員が互いを知ろうとすることによって違いや同じ部分があることがよくわかり、共通理解につながった。
- ・つながりを意識することで、幼稚園の子どもはどのように成長していくのか見通しながら保育を考えたり、小学生がどのような経験を積み重ねて成長してきたのか背景を考えたりすることができた。

<課題>

- ・時間確保の工夫
- ・互惠性のある無理のない交流の在り方
- ・主体性を育む保育の工夫

(4) 洲本市立加茂幼稚園・洲本市立加茂小学校

「生き生きと遊び、学び合う力の育成」～友達とかかわり、心はずませる経験を通して～

1 研究内容

(1) 幼児、児童が自ら考えようとする力の育成

- ① 問題を見いだしたり疑問をもったり、興味や関心が広がる過程を捉える。
- ② 疑問を解決しようと試したり工夫したり、繰り返し体験したりする過程を捉える。
- ③ 友達と同じ目的に向かって、協同して遊びを進める姿を捉える。

(2) 日常の保育・授業の工夫、改善

日常の保育や授業の指導内容のつながりを意識した指導の方向・指導方法を探り、適切な環境の構成や援助を考える。

2 研究方法

(1) 双方の教育課程において教育内容のつながりを検討し、研究テーマに沿って教職員で共通理解する。

(2) 互いの保育・授業を参観、カンファレンスを行い、考えようとする力を育てるための実践記録や事例について話し合う。

(3) 実践記録から明らかになった円滑な接続を進めるための指導方法について協議し、成果と課題を明確にする。

3 学びの基礎力の育成を意識した実践事例

視点：考えようとする力

2年保育 5歳児 9月

(1) 幼稚園

① この時期に目指す幼児の姿

友達と力を合わせて遊びを進めようとする。

② 「考えようとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫

身近にあった箱を使って遊ぶことに興味をもち、友達と一緒にいろいろな形や大きさの箱を工夫して積み上げようとする中で、互いの考えを伝え合ったり、試したり工夫したりできるようにする。

③ 事例 「もっと高く積もう」

ねらい 箱を高く積み重ねられるよう、友達と考えを出し合ったり試したり工夫したりする。

※下線は学びにつながる姿

いろいろな形の箱を積み重ねて遊んでいるうちに、どっちが高く積めるか競い始めた。

しばらくして、相手チームが縦長の箱を載せたことで、いっきに相手チームが優勢になった。このことに気付いたA児が、細長い棒状の箱を見付け、箱の上に載せてみるがすぐに倒れてしまった。A児は、「細すぎるな。」とつぶやいたまま箱を見ている。そこで、教師が「どうしたら倒れないのかな」と声を掛けると、同じチームのB児が牛乳パックを持ってきて、「ここに付けよう。」と、箱の下を指さした。「ええ考えやな。」「やってみよう。」と、A児と一緒に牛乳パックを箱の左右につけた。それを見ていた他の幼児が「もっと付けよう。」と、4面に牛乳パックを付け床に置いてみると、安定して立った。相手チームは、既に自力では載せることができない高さまで箱を重ねている。それを見ながら、「これ載せたら勝てるで。」と笑顔で顔を見合わせている。両チームとも、A児が箱を載せるのをじっと見つめている。そんな中、A児がそっと箱から手を離すと、「やったー!」と、A児のチームから大歓声があがり、わずかな差だったが、高く積み上げることができたことを喜び合った。

④ 教師の援助のポイント

- ・ 友達と一緒に問題が解決できるよう、A児の困っていることに気付けるようにする。
- ・ 考えを出し合ったり、考えたことを試したりできる時間を十分にもち、試す楽しさが味わえるようにする。
- ・ 遊びの目的が達成できた喜びが、「またやりたい」という意欲や問題を解決しようとする探究心につながるようにする。

⑤ 小学校へつながる学びの基礎力

この事例から見取った学び	→	小学校へつながる学びの基礎力
箱の大きさや積み方によって、高さに違いが出ることに気付く。	→	目的に合った形、大きさ、長さのものを選ぶ。
友達に自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら、遊びを進める。	→	相手の考えが分かり、考えを受け入れたり、まとめたりする。
友達と力を合わせて目的を達成することができた満足感を味わう。	→	クラス単位で協力し合いながら遊びを進める充実感を味わう。

(2) 小学校

1年生 10月

① 「考えようとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
相手の考えが分かり、考えを受け入れたり、まとめたりする。	→	相手の思いに気付き、相手を思いやる気持ちをもつ。

② 事例 【道徳 「2わのことり」】

本時の目標：友達のことを思い、やまがらのところへ飛んでいくみそさざいの心情を考えることを通して、相手を思いやり、友達を大切にしようとする道徳的心情を育てる。

指導のポイント：話の内容をより理解しやすいように、イメージしやすい紙芝居や場面ごとの絵などを掲示する。 ※下線は指導の工夫

教師の周りに集まり、教師が読み聞かせる紙芝居を黙って見入っている。終わると、それまで集中していた緊張感が一瞬途切れるが、イスに戻るとすぐに教師の方を見て、教師の話の間を伺おうとする。

教師の「誕生日はどんなことをしますか。」という発問に対して、すぐに数人の児童が手を挙げ、それぞれに自分の経験したことのある誕生日の話始める。教師は、一人一人の意見に「そうなの。」「そんなことしてもらったんやね。」など、意見を受け止める。その度に手を挙げる児童が増え、まだ友達が発表していない意見を発表する。一人一人に応じた教師の共感の言葉に、児童は笑顔になっていく。

話の内容に興味をもったところで、本題に入り、「どうしてウグイスの家に入ったのでしょうか。」という発問で、一瞬子どもたちが黙り手が挙がらなくなった。そこで、教師が新たに提示したウグイスの家の様子の絵を提示し、「絵を見て考えてもいいよ。」と声を掛けると、手を挙げて絵から感じたこと、思ったことを話し始めた。気持ちに寄り添う場面でも、その場面の絵を提示すると、そこからイメージした考えを発表したり、経験を重ねた思いを発表したりする。

話し合いの後のワークシートに、「やまがらさんは、悲しくて泣いているんじゃないか。だめだ、全速力で飛んで行かなくちゃ。」「一人ぼっちだもん。」「早く行かないと待っている。」「みんなも呼んできたらよかった。」「行かなかったら心が冷たくなりそう。」「心配だ、急いで行こう。」「一人ぼっちにさせたくない。」など、やまがらの気持ちを思いやる、それぞれの考えを書いていた。

4 接続のポイント

<幼稚園>

目的を達成するために、考えを伝え合ったり試したりできる時間を十分に確保する。

<小学校>

児童の発達段階の特性を踏まえ、視覚的な教材の工夫や、一人一人の思いに共感するなど、考える楽しさが味わえるようにする。

5 成果と課題

<成果>

- ・教師が常に意識して、一人一人の考えに共感したりタイミングを逃さず援助したりすることで、受け入れられる心地よさや工夫する楽しさを感じ、考えようとする姿につながった。
- ・互いの保育・授業を参観し合ったり、教育内容・実践記録・事例などについて話し合ったりすることで、今まで以上に発達段階や指導の方向性を共有することができた。

<課題>

- ・考えようとする力を育むためには、教師自身が子どもの学びを見取る力を持ち、次の活動に取り組もうとする意欲を引き出すことが大切である。
- ・幼小の連携は、接続期のみにとどまらず、年齢幅のある学年と行い、全教職員で引き継いでいかなないと途絶えてしまう。幼稚園・小学校が互いに必要性を感じ連携していくことが課題である。

(5) 明石市立明石幼稚園・明石市立明石小学校

「異年齢でのかかわりを通して、伝え合う力を身につける」

1 研究内容

- (1) 幼児と児童がかかわりをもつ中で、発達や学びの連続性を踏まえた教育の在り方を考える。
- ① 幼稚園における「かかわる力・伝え合う力」の発達の過程を検証し、小学校の教育課程とのつながりを探る。
 - ・相互のねらいを明確にした幼児、児童の学びの在り方を探る。
 - ② 教職員間での研修の機会をもつ中で、相互理解を進めていく。
 - ・幼児期の発達や学び、経験を踏まえた低学年の指導内容、方法の工夫をする。

2 研究方法

- (1) 幼小の発達や学びの連続性を踏まえたカリキュラムの考案をする。
- (2) 幼小の交流授業や行事の計画をし、合同研修会・UNIT会議による幼小の共通理解の深化を図る。また、相互参観（保育・授業）による実践研究を行う。

3 学びの基礎力の育成を意識した実践事例

視点：伝え合おうとする力

2年保育 5歳児 11月

(1) 幼稚園

- ① この時期に目指す幼児の姿
仲間とのつながりを感じながら、自分たちで遊びを進めていこうとする。
- ② 「伝え合おうとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫
「未就園児に楽しく遊んでもらいたい」という願いから、修理の方法を工夫する中で、友達と考えを出し合ったり、協力し合ったりできるようにする。
- ③ 事例 「ドングリが詰まって転がらない」
ねらい 友達と一緒に考えを出し合いながら、修理の方法を考える。

※下線は学びにつながる姿

ドングリころころゲームの筒の中に、ドングリが詰まって転がらなくなりました。

明日は、未就園児が遊びに来ることになっている。未就園児の子どもたちが楽しく遊べるよう、修理をするようになった。

ドングリころころゲームの場所に集まった子どもたちは、筒の中をのぞいたり、コースに触れたりしながら、ドングリがどこに詰まっているか探し始めた。すると、すぐに「コースを長くしたところで止まっている。」「坂の途中にも、ひっかかっている。」「ガムテープにくっついてる。」など、ドングリが詰まっている場所や、転がらなくなった原因に気づき始めた。

すると、「つるつるにしないといけないね。」という友達の意見を聞いて、つるつるになっているかコースを見始め、修理をはじめた。しばらくして、A児が「ここがあかん。」と筒に段差がついているところを指差している。上からガムテープを貼っても上手くいかず、どうしていいのかわからなくなったようだ。

そこで、一度ガムテープを全部はがし、最初からつなぎ直す方法を提案すると、A児は、はっとしたような表情で大きく頷き、ガムテープをはがし、そばにいた友達に、「ここ、もって。」と頼み、ガムテープでもう一度固定し始めた。

④ 教師の援助のポイント

- ・ドングリが転がらなくなった原因に気づき、友達と一緒に問題解決できるよう、話し合いを見守る。
- ・友達同士で協力して進められるよう、A児の気づきを他の幼児も気付けるようにする。
- ・友達と力を合わせて、根気よく取り組み、目的を達成しようとする姿を認める。

⑤ 小学校へつながる学びの基礎力

この事例から見取った学び	→	小学校へつながる学びの基礎力
自分の気付いたこと、考えたことを友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりする。	→	人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
楽しく遊べる方法を、工夫する。	→	友達と楽しく遊べるよう、友達と相談したり工夫したりする。

(2) 小学校

1年生 11月

①「伝え合おうとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。	→	相手を意識して自分の考えが伝わるように話したり、話を聞いたりする。

② 事例 【国語 「じどう車くらべ」】

本時の目標：自動車にはいろいろな種類があることを知り、学習の見通しをもつことができる。

指導のポイント：家庭から持参した自動車等の模型を活用して、児童の経験している知識と結び付け、調べていこうとする意欲を高める。

※下線は指導の工夫

家から持参したお気に入りの自動車を自由に紹介する。「ショベルカーです。工事のときに、ここで土をすくってトラックに乗せる仕事をしています。」「これはトラックです。荷物を運ぶ車です。」と模型を手にして発表したり、「ごみ収集車です。朝、ごみを集めています。」など自分の生活体験と重ねながら発表したりして、知っている自動車への記憶を呼び起こすことができた。中には、身近では見ることができない、バキュームカーやコンバインなどの紹介もあり、児童の生活体験の広さを垣間見た。ここで自動車への興味が高まった児童は、姿勢に気を付けながらしっかりと声で音読する姿が見られた。

次に、「どんなしごとをしていますか。」「どんなつくりになっていますか。」の文を読み取る学習へと進んだとき、自分の考えに自信がなく、教科書に線を引くことをためらっている児童がいた。隣の友達の様子を見ておぼろげながら線を引いた後、友達の発表内容を聞いたり、自分も声に出して発表したりして、しっかりと問いの文をつかむことができた。また、「しごと」と「つくり」の言葉の意味を日常の言葉で考えさせた。「しごと」は、働くこと、人を助けることをするという言葉でつながった。「つくり」では、黒板に掲示してある写真を利用して、「例えば、消防車はホースがついたりするのがつくりだと思います」「ドアがついていたり、窓があったり、どんなふうになっているかを表す言葉です。」と発表することができた。具体的な部分を示しながら発表することができていたので、難しいだろうと予想していた「つくり」の意味もつかむことができた。ただ、まだ十分に理解できていない児童もあり、次時からの一つ一つの自動車を調べていく学習の中で、明確にしていくこととした。

4 接続のポイント

＜幼稚園＞

友達と協力して問題が解決できるよう、自分の考えを伝えたり、友達の考えが分かって自分の考えに取り入れられたりできるようにする。

＜小学校＞

言葉だけで表現しきれない部分を、実物や絵などを使うことで、相手に分かりやすく伝えられるようにする。

5 成果と課題

＜成果＞

- ・幼稚園と小学校の教育課程を互いに検証する中で、学びの在り方を共通理解することができた。
- ・互いの保育・授業を通じた研修機会をもつことで、指導内容や方法の工夫につなげることができた。

＜課題＞

- ・期間が短く、教育課程全体を通しての学びの連続性が捉えきれていないので継続して深化を図りたい。

(6) 赤穂市立高雄幼稚園・赤穂市立高雄小学校

「人や自然とのかかわりの中で伝え合う力を育む保育・授業の創造」

1 研究内容

(1) 「伝え合う力」を育む。

① 身近な人や自然とのかかわりの中で、豊かな感性を培い言葉の育成を図る。

・地区の特性を生かし幼児の実態に合わせた教育課程・カリキュラムを作成する。

(2) 幼稚園と小学校との交流を通して、幼児・児童のそれぞれの発達の特長や課題を理解する。

① 研究保育・研究授業を行い、幼児・児童の実態から理解を進め、課題を探る。

・事前、事後のカンファレンスを行い、より具体的な研究となるようにする。

② 幼稚園・小学校がそれぞれ大切にしていること、指導形態・方法などに気付き理解する。

・3回の研究保育・授業の他に、それぞれの研究会や交流活動に積極的に参加する。

2 研究方法

(1) 教育課程の見直しをする。

幼小の教育課程を見直して学びのつながりを検討し、幼小をつなぐグランドデザイン、言葉のカリキュラムを作成する。

(2) 自然物・小動物との感動体験を重ねる。

幼児の知的好奇心を触発する自然物や小動物を取り入れた環境を整え、見たこと感じたこと考えたことを言葉や身体など、様々な方法で表現できるようにする。また、振り返りの時間の充実を図る。

(3) 保育・教育内容・指導方法の工夫や改善を図る。

保育・授業参観を交互に3回行い、事前、事後にカンファレンスすることでお互いに理解を進め、保育内容・教育内容・指導方法の工夫や改善を図り、学びの基礎力向上を目指す。

3 学びの基礎力の育成を意識した実践事例

視点：伝え合おうとする力

2年保育5歳児 10月

(1) 幼稚園

① この時期に目指す幼児の姿

友達と考えを出し合い、共通の目的に向かって遊びを進めようとする。

② 「伝え合おうとする力」につながる「学び」をはぐくむ指導の工夫

自分で折れるようになったお気に入りの手裏剣を使って遊びながら、友達とのかかわったり、遊びを工夫したりして、一緒に遊びを進める楽しさが味わえるようにする。

③ 事例 「手裏剣遊びがおもしろい」

ねらい 友達と考えを出し合いながら、目的が実現できるよう遊びを工夫する。

※下線は学びにつながる姿

自分で手裏剣を折れるようになった子どもたちが、2、3人で手裏剣を飛ばし合っていたが、体に当たったり、顔に当たったりすることが増えてきたので、「どんなふうに投げたらいいのかな。」と声を掛けてみた。

最初は「友達のいないところ。」と言って、空間を見つけて投げていたが、A児が「いいこと考えた。」と部屋に置いてあった箱を持ってきて、箱の底に的になる円をかき、箱を立てかけて的に向かって投げ始めた。そこへ他の幼児も「おもしろそうや。やらせて。」と、仲間に加わったが、なかなか的に当たらない。「これ低いから当たらへんのとちがうか。」「高くしたらいいやん。」「もう一つの箱の上に置いたらいいと思う。」と言って、箱を探してきた。

手裏剣が的に当たり始めると、手裏剣の投げ方やポーズを工夫し始めた。そのうち手裏剣の飛び方が違うことに気付いたA児が「Bちゃんの手裏剣、シュッって飛んでかっこええな。」と言うと、B児は「こうやるんで。」とスナップをきかせて投げて見せた。

他の幼児も「どうするん?」とそばに集まってくる。B児は、「こうやるんや。」と、スナップをきかせるところを4人に見せながら、手裏剣を投げる。「こうかな。」「えい!」と、B児の投げ方を真似しながら、手裏剣投げを楽しんだ。

④ 教師の援助のポイント

- ・友達とかかわり、遊びを工夫できるよう、遊びに必要な用具や素材を幼児と一緒に用意する。
- ・友達の工夫に気付き、友達を認めたり友達の真似をしたりするかかわりを温かく見守る。
- ・友達の真似をしながら自分なりの工夫を見付けようとする姿を認める。

⑤ 小学校へつながる学びの基礎力

この事例から見取った学び	→	小学校へつながる学びの基礎力
身近なものを使って遊びを工夫する。	→	友達の考えを取り入れながら、一緒に遊びを工夫して進めることを楽しむ。
友達の工夫に気付き、自分も真似てみようとする。	→	友達の考えが分かり、自分の考えに取り入れる。

(2) 小学校

1年生 10月

① 「伝え合おうとする力」につながる学びの基礎力

小学校へつながる学びの基礎力	→	小学校で深まる学びの基礎力
友達の考えが分かり、自分の考えに取り入れる。	→	人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。

② 事例 【道徳 「どこんじょうだいこんの大ちゃん」】

本時の目標：生命の力強さや尊さを感じ取り、大切にしていこうとする心情を育てる。

指導のポイント：自分の思いが素直に表現できるよう、ペープサートを使ったり、ペアトークを取り入れたりする。

※下線は指導の工夫

場面ごとの挿絵を見せながら、教師が読み聞かせる。

場面ごとに読むことで、場面の状況を捉えやすく、集中力も途切れず教師の発問や友達の意見を聴くことができている。

主人公の気持ちを考えるときは、実際に経験したことを引き合いに出して考えさせることで、自分なりの考えがしっかりと話せ、より主人公の気持ちに近づくことができている。また、自分の思いをまとめて話すことができにくい児童にも、頷き、共感しながら、「〇〇ということやね」と、言語化につながるようまとめることで、聞き手への理解につながっている。

「主人公がどこんじょうだいこんの大ちゃんにどんな言葉を掛けてあげる」という活動では、ペアトークを取り入れ、二人に一つずつペープサートの「大ちゃん」を配る。児童は、受け取るとすぐにペープサートに「大ちゃん早く元気になってね。」と話し始めた。ペープサートに話しかける活動に心が動かされたようで、どの児童も主体的に活動している。中には、一人が話しかけると、相手の児童が大ちゃん役になって、「うん、がんばるよ。」と応えているペアがあった。

時間を十分にとることができたので、何回もやりとりをしているうちに、「どんどん大きくなって、赤ちゃんをうんでね。」というように、さまざまな考えが出てきた。また、全体の場では、発言できなかった児童も、友達と何度もやりとりを続けることができていた。

4 接続のポイント

<幼稚園>

ペアで話し合うことで、お互いの意見を言ったり聞いたりしやすくし、お互いの意見を取り入れられるようにする。

<小学校>

遊びの目的が実現できるよう、自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら遊びのイメージが共有できるようにする。

5 成果と課題

<成果>

- ・お互いに幼児・児童理解が進み、保育・授業を振り返り、指導や教材の工夫や改善をすることができた。
- ・「学び」をつなぐという研究から幼児期から児童期への発達につながりを見直すことができた。

<課題>

- ・一人一人の「学び」をつなぐためにも連携を深め、個々の幼児理解・児童理解をさらに進めていく。

実践から明らかになったこと

(1) 「学びの基礎力の育成」のための指導内容・指導方法の工夫

① 学びの芽生えから自覚的な学びへ

幼児期から児童期にかけては、学びの芽生えと自覚的な学びの両者の調和のとれた教育を展開する。

幼児期においては、調べる、比べる、尋ねる、協同するなどの様々な手法を組み合わせ楽しみながら課題を見出し解決する取組を通して、学びの芽生えから自覚的に学ぶ意識へとつながるように取り組む。

児童期においては、自覚的な学びを確立するとともに、楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切に、学ぶ意欲を育てる。



② 「3つの自立」と「学力の3つの要素」

幼児期の終わりから児童期における学びの基礎力の育成では、人やものに興味をもち、かかわる中で様々なことに気付くとともに、それらを深め、広げていく過程の中で、自己発揮と自己抑制を調整する力を育む。

幼児期の終わりには、気の合った仲間同士の活動だけでなく、クラスにおける共通の目標を意識したり、自分の役割を理解したりして、集団の一員としての自覚を育てる活動を重視する。

また、「身近な社会生活、生命及び自然に対する思考力の芽生え」「言葉の正しい使い方」「豊かな感性と表現力の芽生え」について、今まで学んできたことを総合化し、小学校生活に向けて学びを高めていく。

児童期のはじめには、校時表や集団行動のきまりを理解し、自分の興味、関心に基づいた活動に夢中になって取り組む中で、課題を発見したり、調べたりすることで学習を深めていく。

また、学校教育活動全体を通じ、与えられた課題について友達と助け合いながら、自分が果たすべき役割をしっかりと果たし、楽しく充実した集団生活ができるような活動を進める。

さらに、各教科等の指導を通じて、「基本的な知識・技能」「課題解決のために必要な思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」からなる「学力の3つの要素」を培う。

③ 幼児期と児童期が共通して抱える課題から

近年子どもの育ちについて、基本的な生活習慣が身に付いていない、他者とのかかわりが苦手である、自制心や規範意識が十分に育っていないなどの課題が指摘されている。

また、小学校1年生の教室において、学習に集中できない、教員の話が聞けない、学習に対する意欲や関心が低いとの指摘もある。

双方の教育においては、双方の課題を共有し、その課題解決を共通の教育目標として教育活動を進めていく。

④ 指導方法の工夫

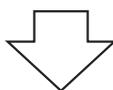
これら①②③のことを踏まえて、一人一人がスムーズに移行できるよう、具体的にイメージした幼児期の終わりに目指す姿、児童期のはじめに目指す姿を参考に、幼児・児童の生活を見直したり、指導方法を工夫したりすることが必要である。

幼児期の終わりに目指す姿

- 1 基本的な生活習慣を身に付ける。
- 2 時間の見通しをもって生活し、友達と一緒に活動することを楽しむ。
- 3 自分の考えを伝えたり、人の話に気持ちを傾けて聴いたりする。
- 4 遊びの中で数量・図形や文字に関心をもつ。

児童期のはじめに目指す姿

- 1 興味、関心をもって学習の課題を受け止め、主体的に取り組む。
- 2 考えたり、話したりすることが楽しい。
- 3 友達と分かり合ったり、協力し合ったりする。



ア 学びの芽生えから自覚的な学びへ円滑に移行するために

- ・ 幼児期においては、人やものに働きかけ、その中でおもしろいものを見付けたり、根気よく取り組んだり、試行錯誤したり、工夫したりすることができるようにする。
- ・ 幼児期、児童期においては、直接的・具体的な対象とのかかわりの中で、体験を重視した教育活動が進められるようにする。
- ・ 人やものとのかかわりを支えるために重要な役割を担う言葉や表現は、学びの基礎力をはぐくむ上でも重要である。また、学びの基礎力がはぐくまれる中で、言葉や表現も発達していく。このことを踏まえて、言葉や多様な表現を通してやり取りする中で気付きや思考を深めていけるようにする。

イ 「3つの自立」と「学力の3つの要素」を培うために

- ・ 幼児期においては、幼児の興味・関心や生活、協同性の育ちを踏まえて、教師が方向付けた課題を自分のこととして受け止め、相談したり互いの考えに折り合いを付けたりしながら、クラスやグループみんなで達成感をもってやり遂げられるようにする。
また、思い通りにならないという経験を通して、自他の立場が違うこと、他者も自分と同じようにそれぞれの意志や欲求、感情をもっていることに気付けるようにする。
- ・ 児童期においては、幼児期における人とのかかわりの指導状況や実際の子どもの発達や学びの状況を把握した上で、与えられた課題について友達と助け合いながら、自分が果たすべき役割をしっかり果たせるようにする。

ウ 幼児期と児童期が共通して抱える課題を解決するために

- ・ 育ててほしい子どもの姿を共有し、その育成に向けた教育活動を推進する中で、学びの基礎力がはぐくまれるようにする。



(2) 幼児期から児童期に培われる学びの基礎力（事例から抜粋）

幼児期の教育ではぐくむ学びの基礎力			
視点	事例から見取った学び	視点につながる「学び」をはぐくむための教師の援助のポイント	小学校までに育つ視点につながる「学びの基礎力」
自己を調整しようとする力	事例1-1	<ul style="list-style-type: none"> 互いの思いに気付けるよう、教師は中立の立場で子どもたちの話を聞き、整理する。 友達の話が分かり、友達の意見を納得して受け入れられるよう、話し合える時間を十分にとる。 遊びのルールが分かりやすいように、その伝え方を工夫しようとする姿を認める。 	<ul style="list-style-type: none"> 互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。 きまりの大切さに気付き、守ろうとする。
	事例2-1	<ul style="list-style-type: none"> 互いの思いに気付けるよう、遊びの様子を見守りながら必要な援助をする。 自信をもって自分の思いを伝えられるよう、一人一人の意見に傾き、共感する。 A児の気持ちに気付き、気持ちに寄り添って考えようとする姿を認める。 	<ul style="list-style-type: none"> 互いの思いを伝え合いながら、分かり合って遊びを進める。 きまりの大切さに気付き守ろうとする。
考えようとする力	事例3-1	<ul style="list-style-type: none"> 頭にぴったりの長さに画用紙を切りたいというA児の思いを受け止め、これまでのA児の生活経験や、やる気から判断して試行する様子を見守る。 A児がイメージしていたように冠を作ることができた喜びに共感し、A児があきらめずに試行錯誤できた姿を他児にも広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の考えを取り入れて、工夫しながら遊びを進める。 目的が実現する方法を、今までの経験から予想して試す。
	事例4-1	<ul style="list-style-type: none"> 箱の大きさや積み方によって、高さに違いが出ることに気付く。 友達に自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら、遊びを進める。 友達と力を合わせて目的を達成することができた満足感を味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と一緒に問題が解決できるよう、A児の困っていることに気付けるようにする。 考えを出し合ったり、考えたことを試したりできる時間を十分にもち、試す楽しさが味わえるようにする。 遊びの目的が実現できた喜びが、次の活動の意欲や問題を解決しようとする探究心につながるようにする。
伝え合おうとする力	事例5-1	<ul style="list-style-type: none"> 自分の気付いたこと、考えたことを友達に伝えたり、友達の考えを聞いたりする。 楽しく遊べる方法を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。 友達と楽しく遊べるよう、友達と相談したり工夫したりする。
	事例6-1	<ul style="list-style-type: none"> 身近なものを使って遊びを工夫する。 友達の工夫に気付き、自分も真似てやってみようとする。 思ったこと、考えたことを自分なりの方法で表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の考えを取り入れながら、一緒に遊びを工夫して進めることを楽しむ。 思ったこと、考えたことを言葉で伝えようとする。

学びの基礎力育成の連続性・一貫性について

- ・幼児期の教育と児童期の教育の共通の教育目標を共有することで、目標達成のための一貫した教育活動を推進することができ、連続した学びの基礎力をはぐくむことができる。
- ・小学校までにはぐくまれる学びの基礎力は、幼児期の活動とよく似た活動の中ではぐくまれるだけでなく、児童期の全ての教育活動においてはぐくまれる。
- ・学びの基礎力をはぐくむには、言葉や表現する力が重要な役割を担っている。逆に、学びの基礎力がはぐくまれる中で、言葉や表現する力もはぐくまれる。

※この表は、視点ごとに幼児期から児童期にはぐくまれていく「学び」を一覧にしています。

		児童期の教育ではぐくむ学びの基礎力	
視点		視点につながる「学びの基礎力」をはぐくむ 具体的な指導の手法と教科「単元名」	小学校で育つ 視点につながる「学びの基礎力」
自己を調整しようとする力	事例1 1-2	<ul style="list-style-type: none"> 話し合ったり協力し合ったりするのに適したグループの人数を考慮する。 自分たちで課題を解決していこうとする気持ちを状況に応じて後押しし、自己実現できた達成感が味わえるようにする。 《生活「あきってきもちがいいね」》 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と協力し、自分たちで生活を楽しくする方法を工夫する。
	事例2 2-2	<ul style="list-style-type: none"> お互いの思いや頑張りに気付くのに適したグループの人数を考慮する。 グループごとに作戦タイムの時間をもつことで、グループ全員で協力したり、練習したりできるようにする。 《体育「ボール遊び」》 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の気持ちを大切に考えながら行動する。
考えようとする力	事例3 3-2	<ul style="list-style-type: none"> 「キツネとタヌキのしっぽくらべ」という導入をすることで、児童が興味・関心をもって授業に臨めるようにする。 比べ方について、自分の考えを発表したり友達の考えを聞いたりしながら自分たちで課題を解決していけるようにする。 比べ方を自分たちで試行錯誤できるように、ワークシートを配布する。 友達からヒントを得たり、教え合ったりできるように、グループ活動にする。 《算数「おおきさくらべ」》 	<ul style="list-style-type: none"> 今までの経験を生かして、目的が達成できそうな用具を選び、比べ方を工夫する。
	事例4 4-2	<ul style="list-style-type: none"> 教師の手作り紙芝居を、教師のそばで読み聞かせる。 自分の生活経験からお話の世界がイメージできるように発問する。 児童一人一人の発表に丁寧に共感し、自分の思いが受け入れられる、伝わる安心感が味わえるようにする。 場面ごとの絵を掲示し、絵を通して主人公の気持ちが考えられるようにする。 《道徳「2わのことり」》 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の思いに気づき、相手を思いやる気持ちをもつ。
伝え合おうとする力	事例5 5-2	<ul style="list-style-type: none"> 家庭から持参したミニカーなどを活用して、経験をもとに発表する機会をつくる。 児童の言葉の表現を補ったり、イメージを膨らませたりできるように、自動車の写真を掲示する。 自分から発表しようとしないう児童も、無理なく発表できるような機会をつくる。 《国語「じどう車くらべ」》 	<ul style="list-style-type: none"> 相手を意識して自分の考えが伝わるように話したり、話を聞いたりする。
	事例6 6-2	<ul style="list-style-type: none"> 教材は一度に読まず、場面ごとに挿絵を見せながら教師が読み聞かせをする。 自分の生活体験から主人公の気持ちが考えられるようにする。 ペアトークにペープサートを取り入れ、ペープサートを使うことにより、自分の考えを出しやすくさせるなど、伝え合う楽しさが味わえるようにする。 《道徳「どこんじょうだいこんの大ちゃん」》 	<ul style="list-style-type: none"> 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。

- 互いの教育を見通すことで、つながりのある指導内容、指導方法を工夫することができる。
- 学びの基礎力には、深化させていくものと、基本的な生活習慣等、変わらず継続していくものがあることを意識し、学びの基礎力をはぐくんでいくことが必要である。
- 児童期の教育においては、指導内容や児童の発達段階に応じて、幼児期の指導方法を取り入れることで指導方法のつながりを保つことができる。

幼稚園教育のあゆみ 第46集

平成26(2014)年3月発行

兵庫県教育委員会義務教育課
神戸市中央区下山手通5丁目10-1
電話(078)341-7711(代表)

—この冊子は障害のある人が働いている施設で製作しました—